大分大学附属小学校の授業（We Can!1, Unit 5, She can run fast. He can jump high .）へのコメント

①単元を分担して組み立てたり，学年の先生に授業を見てもらったりしながら，授業をつくっていたことで，４Ｒ（英語を使う必然性，やりとりのリアル感，楽しさ，相手意識）をどのように取り入れるのかについての不安や課題を共有できるところがすごくいいなと思いました。He/Sheの授業では，児童が「紹介する人の名前を何度も呼ぶことに違和感を感じる」という意見を引き出し，単元の学習に入ったことで，やりとりのリアル感が見えました。He/Sheの学習では，男女の区別を強調してしまうのですが，He/Sheの使い方を身に付けながら，もっと良い指導法がないかを考えてみることも必要だと思いました。He/Sheは男女の区別だけでなく，第3者に伝えるものであるということも教師が伝えようとしており，You/Iなどの表現も積極的に取り入れていたところをまねしてみたいと思いました。その時に，Youを使って話すときは相手に，全体へ話すときには全体に向けて伝えるという区別を目線でも表現することで，さらに児童に伝わりやすくなるのではないかと思いました

②良い点 ・研究授業の前や単元構想を考える時に、教員間の連携があり、様々な角度から考えることができ、より良い授業や単元構成をつくれそうだと思いました。 ・最初に先生が女性の先生を紹介する時に、毎回名前を言って、「しつこいな。何か言い換えが出来ないかな？」と子どもが思うようになっていたことで、今回の学びに自然と向かいやすくなる工夫がされていた点です。 ・元附属小の先生だった知っている先生たちを紹介する中で、子どもたちが親近感を持って授業に参加している所です。 ・先生達の顔写真を男女に分けていくことで、子どもたちが自然と男性は「he」女性は「she」を使うと気づいている点です。 課題と思われる点 ・課題点はあまり見つからなかったのですが、最初の挨拶の所で「How are you?」と個別に何人か声かけても良いと思いました。なぜなら、子ども達の反応が決まり言葉みたいな感じになっていると感じたからです。

③良い点は沢山あります。まず、導入の時点でめあてに繋がるような手立てを考えていました。sheやheを使って、「How are you？」に答えていました。次に、実際の先生方を例にあげているため、子どもの興味を引くことが出来ます。そのため、子どもが授業が楽しいと感じることが出来るのではないでしょうか。特に印象に残ったのは、先生方の紹介をしている時、担任の先生が、ジェスチャーをたくさん取り入れていました。そうすることによって、聞き取れなくてもなんとなく推測して、意味を理解することが出来ます。また、以前習ったcanを十分に取り入れていました。最後に、板書がほぼ写真だけで、簡潔にまとめられていました。頭が混乱することなく、授業に集中できます。課題だと思われる点については、Ms.Arimaの紹介の時に、代名詞を使った方が良いと子どもに気づかせるという点はとても良いと思ったのですが、私としては、あれだけで、代名詞を使った方が良いと気づく子どもは少ないのではないかと思いました。

④良かった点としては、導入のあいさつからクラスルームイングリッシュの中で、SheやHeを用いており、会話の中に自然に用いていた点が展開の内容に繋がり、良いと思いました。 また、本時の内容に入る前に、Let’s chantsで表現を音声で慣れ親しませている点が良かったとともに、本時の内容では、「MS.ありま」を連発して紹介して、「子ども達に違和感（しつこいなど）」を持たせ、めあて：「Ms～とくり返さなくて済む言い方で紹介しよう。」といった流れがとてもスムーズで、めあてへの繋げ方として参考になりました。そして、紹介をする相手として、児童にとって身近である先生を取り上げることで、興味・関心をひきつけることはもちろん、「知らなかった～！」「相手のことをもっと知りたい。」など、後の授業のインタビューや実生活にも結び付く、リアルなやり取りになっていた点が印象的でした。 他にも、教師が教室を広く使っていろんな児童とのやり取りを図っていたり、実際に友達に先生を紹介する場面では、「できることリスト」が活動の手助けになっている様子が見受けられたため、良い手立てだなと感じました。 　改善点としては、ビデオ教材を視聴する前に、「次は、She/Heに注目して聞いてみよう。」と声をかけたり、ビデオ視聴後には、「Sheって使ったら、紹介できそうかな？」といった声かけをしていましたが、それよりも、「授業のはじめの先生の紹介と比べてどうだった？しつこい感じしたかな～？」といったように、代名詞を使うことの効果に気づかせる声かけをした方が、より子ども達も代名詞を使って紹介したくなるといった動機付けや必然性に繋がると感じました。また、まとめの部分でも、ひとこと代名詞について触れた方が、よりめあてとの関連性が生まれるのではないかと感じました。

⑤良かった点は、初めの挨拶、スモールトークでshe,heの表現を取り入れていたことと、英語を話しながらジェスチャーが上がったことの、主に2点である。 1点目に関しては、初めにこれらを取り入れたことによって、授業の入り方がスムーズになっていた印象を受けた。授業の本題でいきなり新しい表現を聞くのではなく、前段階で聞いていることにより、さっきも言ってたなあ、なんだったっけ、と思い返しながら意味を想像できるのではないか、と考えた。またhe,sheの違いを児童から丁寧に聞き、引き出していた点もとても良いと感じた。 2点目は、難しい表現が出てきたときに発音だけでは意味が想像できないが、ジェスチャーがあることによって児童は意味を想像することが出来ていた。これは発音と一緒にイラストを出すのと同じように、ジェスチャーを加えることによって、意味を想像しやすくなる、これは答えを言っているように感じるかもしれないが、でも初めに答えを言わせるのは、先生ではなく、これらの工夫をすることで児童になるのでとってもいい手法であると考える。 改善点は、思い当たりませんでした。 その他として、前に人物の名前を挙げた際、ただ模造紙にスペルが書いているのではなく、４線上に書かれていたこと、これも小さな工夫ではあるが、まだアルファベットを描き慣れていない小学生にとっては、とても大事なことであると感じた。また授業全体を通して、他の先生方の出来ること、出来ないことを知れた単元であったため、児童も興味を持って、主体的に授業に取り組めていたのではないかと考えた。

⑥heかsheかの理由を何度も問うことで定着を図っていた。一度聞かせて聞こえた単語を発表させてから、heと sheの存在に興味を持たせて2回目を聞かせることで、聞いて欲しい部分をよく聞いてもらえるようになっていた。身近な先生の紹介や写真を持ってきていて、子どもたちはみんな興味深々で食いつくように授業を受けていた。また、とても盛り上がって楽しそうだった。彼は〜ができますか？と言う質問に対して、「No,can't.」と答える児童がいた。その時先生は間違いをそのままにしていたのは、よかったのか疑問に思った。クラスメイトの出来ることで誰かを当てるゲームをしていて、クラスメイトの顔写真もあって、親しみを持ってゲームを行えていた。だか、〜が出来る、出来ないと言う表現が、子どもに劣等感を与えてしまわないか心配になった。

⑦SheとHeの使い方や違いを学ぶ授業として、他の先生を使って学んだり、クラスメイトを使って学んだり、教科書から外れたところでやることにより、日常的に英語を親しめることが出来てとても良いと思った。また最初の数回は先生がSheとHeを使って話した後、子ども達が慣れたときに子ども達でSheかHeかを判断させたりと、同じ活動内容なはずが先生のアプローチの仕方によって、インプットとアウトプットを同時に出来るのだと感じた。また、SheやHeだけではなく、色んな英語を会話や活動内容の中で盛り込ますことで、子ども達に沢山の英語を届けることができ、外国語に耳が慣れたり、単語を増やすことが出来ると感じた。

⑧良かった点 今回のビデオから様々なことを学ぶことができた。その中でも特に３つを述べたい。１つは、英語の授業において大切にしている４つの視点①必然性②リアル感➂楽しさ➃相手意識、これらを基に目的場面に応じた授業を教師だけが意識しているのではなく、子どもたちとも共有していることが良かった。２つは、子どもたちに気づかせることを大切にしていたことだ。she,heが何を表しているのか、どこで使うのか、それらを教師の紹介の時など具体的な場面を用いて、she とheの使い分けに気づかせていた。 また、導入からめあての提示がスムーズに行えていたことと、(Ms.⚪︎⚪︎を繰り返さなくて済むと言い方で先生を紹介してみよう)というめあては、子どもたちから出た発言を基に作り上げられていた。一般的な(she ,he を使ってみよう)のようなめあてではないところが良かった。 ３つは、小さなことではあるが教師を紹介した後、黒板に貼るときに男と女を分けていたことだ。そうすることにより、女の人はsheで男の人はheということを子どもたちは自分たちで気付けていた。 気づいた点 教師を紹介するとき、担任はジェスチャーや表情も変えながら話していたので、日本語を話さなくても英語とそれらを繋げて、子どもたちはイメージして理解できている様子だった。 最後の振り返りでもあったが、He,She 意外にもcan,can’t の使い分けがしっかり出来ていた。また、英語だけでなく、得意なことや苦手なことなど、知らなかったことを共有できる環境は、互いに新しい発見にもなるし面白いだろうと改めて感じた。

まず授業の良かった点は，児童の反応を多く考えられるように多くの「眼」で見て考えるようにしていた点，英語の単元構成の4Rを学年の教師で評価し合うシステム，挨拶のGreetingでHeやSheを使ってinputしていた点，黒板の右手にScheduleを貼りだしていた点，附属小学校の教員にインタビューするという必然性やリアル感が感じられる目標設定，ジェスチャーを多用していた点，教員だけでなく学級の児童に"Can you ～？"で聞き，"He/She can"に繋げて紹介していた点，場面ごとに注目してほしい際には"Put your pencils down."と一区切りしていた点が挙げられた。4Rは私も実際に授業を行う上で重要視していきたいものだと考える。一方で課題と思われた点としては，視聴覚教材を聞く際にメモを取らずに聞いている児童の対応や，一回一回"Ms.○○と言ったらどう？"という発問に対して"そのままでもいいと思う"と言われたらどの様に次の段階にもっていくのか気になった点，Activityで教師のtalkingを繰り返して聞かせなくても良かったのかという点が挙げられた。附属小学校というのもあるのか，児童のレベルが高く，予め何らかの"He/She"に関する知識を持ち合わせていたために成り立った授業構成だったのではないかと感じたことや，教師の表情が気持ち笑顔が少なく感じた点もあった。目の前の児童の実態に沿った，英語を話す「必然性」や「楽しさ」，「リアル感」，円滑なコミュニケーションの上で欠かせない「相手意識」を私も取り入れて授業構成をしたいと思う。

⑨動画から、大分大学附属小学校の先生方が研究授業の事前に集まって授業の中で、こどもたちにHeやSheをどのようにして教えるとわかりやすいかなどの話し合いをしていた。もともとHeやSheを知らない子どもからすると、しっかり工夫が必要だと思った。授業の中では、先生が英語をたくさん聞かせて子どもたち同士で英語を使ってみる活動があるのが良いと思った。そして、子どもたちが知っている先生やクラスメイトの紹介をするというのも、楽しい授業をする中で大切だと感じた。授業の始めに、先生が名前を繰り返しながら紹介して子どもたちにMs.○○と繰り返すのが大変であると気づかせるのは少し難しいのではないかと思った。知っている子はわかると思うし、この学級の子どもたちはわかる子が多いかもしれないと考えた。だから、Ms.○○で紹介するときとSheを使って紹介するときを聞かせて、どっちが言いやすいのか子どもたちに考えさせるという感じを私だったらやるのかなと思った。先生方の連携の重要性と外国語活動での大切なことが改めて感じられた。

⑩今回の授業での良い点は、男女一人ずつ生徒の顔写真を見ながら得意なことを紹介する時に、sheとheに着目できるよう、得意なことを同じに設定する事で英文はほぼ一緒だが、sheとheの違いでどの生徒か当てることができるようにしている点である。また、授業の導入部分であえてsheやheを使わずにミスター〇〇を何回も繰り返すことにより、「少しおかしいぞ、じゃあ何を使えばいいんだろう」という児童の学習の意欲や動機付けにつながり、とてもいいなと思った。課題点としては、色々な先生を紹介する際、sheや heに着目させたいが先生方の得意なことの英文ばかりに注目してしまっているのではないかと感じてしまった。解決方法として、英文のsheやheを先生が言うのではなく、児童に発言させたりしてその後に続いて先生の得意なことを紹介する英文を先生自身が読むなどしたら、児童もsheやheに着目する上に、得意なことを表す単語などのボキャブラリーが増えて一石二鳥だと思う。

⑪私がこの授業で特によいと感じた点は2つある。一つ目に「具体的で必然性を持つ学習」である。これまでの大学の学びの中で私が一番授業づくりに大切だと思っているのは「動機付け」である。模擬授業でも「この活動をします」と言われた時と、「○○をしたいのでまずは○○をしましょう」と言われた時では、児童役の活動内容が大きく変わると感じた。明確な目的や活動の意義を見出せるかどうかは動機付けにかかっており、その動機付けがきちんとなされている授業程やりがいを感じると思う。このビデオでは子供たち自身で「Ms.Mr.を繰り返すと変だ」と感じたから「Ms.Mr.を繰り返さない表現方法」を学ぶという学習の意義がはっきりと示されていた。子供たちはただ暗記をさせられるのではなく、目的をもって学習に臨んでいたと思う。その点がとても素晴らしいと感じたし、動機付けに必要な要素が「具体性」と「必然性」であることが分かった。次に、学習事項の反復の工夫である。簡単なやり取りやクイズでは子供のやる気をそぐことにつながるし、自分で学習を進めている子供にとっては授業に期待しなくなってしまう。しかし、実際に関わっている友達のことや先生のことを教材にすると、わかっていても簡単でも「ワクワク」してしまう。子供たちが楽しみながらクイズやスピーキングの活動に参加している様子を見て、子どもを引き付ける活動であり、「楽しんでいるだけなのに自然と学ぶことにつながる」授業であると感じた。まだまだ参考にしたい点が多くあり、個人的にはとても良い授業だと感じたため、特に課題点を見つけることはできなかった。他の方の感想を聞いてみたい。

⑫本ビデオの前半に挙げられていた外国語授業を作る際の大切な4つの視点の一つの「子どもたちが英語を使う必然性」において、今回の授業内での活動で子どもたちは、「英語を使おう！」と思える内容であったか疑問に思った。隣の人に紹介するのみならず、例えば「ホームステイに来る留学生に自分の家族を紹介しよう」などと自分ごととして考えやすい内容ならば、もっと英語を使う必然性が高くなるのではないかと考えた。 今回、「he」「she」についての指示語の単元が行われていたが、その単元の英単語のみならず既習単語が数多く授業内で登場していたため、とてもよいインプットになったと思う。また教師や子どもたちが多く使用していた「can」や「can't」の表現方法も、繰り返し使用することで定着を英表現の定着を図ることのできる授業であると感じた。この際、「can」「can't」の聞き取りが少し難しく感じたため、教師は視覚的にもどちらの言葉を発しているのか子どもたちにわかりやすくするために、ジェスチャーを大きくするなどの手立てが必要であると思う。

⑬授業の初めに女性の先生の紹介をした後に、１人の子どもが「何回も言わないで良いようにsheとかを使った方がいいと思う。」と言っていたのだが、もし誰1人繰り返して言っていることに気がつかなかったり違和感を覚えなかったりした場合はどのような対応をしたのかが気になった。名前が短くて言いやすい日本人の先生ではなく、ALTの先生などミドルネームがあって名前が長い先生を紹介し、主語である名前をあえて少し言いにくそうにしてみたら、より多くの子がくりかえして言うことに違和感を感じ、繰り返し言わなくてもいい表現を使うことに気がつくのではないかと考えた。いろいろな先生の紹介の際に、先生が動作を交えながら紹介していたので子どもが楽しそうに授業に参加していた。先生が恥ずかしがらずに子どもと同じ気持ちになって授業をすることで子どもたちは教師に自然と興味を持ってついてくるようになるのではないか。また、子どもたちに馴染みのある先生方の紹介をすることで子どもはより授業に興味を持ち、楽しく参加することができる。単元構想の要素の１つである「楽しさ」を取り入れていることがここから伺える。授業を行う前に、教師が集まって研修会を開き、そこで模擬授業をしてアドバイスをもらっていた。それにより、より授業がいいものになり授業を提案した先生が気づけなかったところに先生が気づけることができるメリットがあると思った。

⑭〈良かった点〉単元を構成する4つ要素は、授業を作るときにすごく参考になるなと思いました。これまでに学習してきたことが、ぎゅっと詰まった感じで、映像にでてきたときは納得しかなかったです。次に、He/Sheの使い分けについてです。直接教師が伝えるのではなく、学校の先生たちの紹介と、先生たちの顔写真の仕分けから、子どもたちが推測していくという流れがとてもスムーズだと感じました。いくつからの具体例からの推測は、外国語だけに限らず、他の教科や日常生活でも必要な思考なので、このような流れの学習は、汎用的だと思いました。あと、本単元のキーワードを様々な人の紹介文に忍ばせていくことにより、何度も聞いているんですが、あまりくどさを感じることはありませんでした。くどさを感じないという点は、単元を構成する4つの要素の中の一つ、リアル感からの発想かなと思いました。直接会うことができる学校の先生は、子どもたちにとって“リアル”な存在であるから、話を聞いていても集中を切らすことなく内容を理解しようとするのだと思いました。最後に、他者と自己の違いを知ることができる授業だと思いました。先生たちの紹介を通して、先生ができないことが自分はできるという気づきが生まれ、その気付きから子どもの自己肯定感が向上していくことができると感じました。〈課題点〉課題点としては、1つあると思いました。外国語に関連するかはわかりませんが、先生たちを“男女で”分けていたところです。たしかに、先生たちの写真を男女で分けていくことにより、子どもたちも整理しやすいと思いますが、そのように男性か女性かで分ける考えがついてしまったら、人の多様性の観点からすると少し危険なのかなと感じました。このようなやり方を行うなら、他の授業などで補足説明が必要かなと思いました。〈その他〉米津玄師最高でした！

⑮授業が始まる前の先生たちの模擬授業で話していたことは、担当の先生にとってとても役に立っていると思った。 授業のはじめで、HeとSheが自然に聞こえるように、文章を作って、児童たちに話をしていた。 これで、児童たちはこの言葉に引っかかりを持ち、授業でこれからやることを予測できると思う。 HeとSheの違いを説明するときに実際の児童たちの先生を使うことで、児童たちはより聞く姿勢になる。 クイズのときは、クラスメイトの写真を使って、問題を作っているので、子どもたちはとても楽しく、受けることができる。 今回の授業はたくさんの先生の話し合いの結果できた授業で、たくさんの工夫が見られた授業だった。

⑯まずは、今回の授業を見ての良かったと思う点をまとめる。一つ目は、めあてである、heやsheの表現を教師が積極的に使っており、めあてと関連させているところが良いと感じた。せっかく本時のめあてとして設定しているので、積極的に使い、児童に自然に慣れてもらうためにも効果的だと感じた。二つ目は、heとsheの区別をする際に、適当な男性と女性の写真ではなく、児童に関係する先生たちを登場させた点である。賢先生の講義の中でもあったが、楽しみながら学ぶという観点で見た時、かなり有意義だと思う。先生の一面を知ることができたり、次は誰が出てくるかなとワクワクしたりしながら学ぶことができるため、非常に効果的だと感じた。3つ目に、who is he(she)？ゲームを取り入れている点である。児童が学んだことをもとに活動することは重要であるが、ただ意味もなく練習したり使ったりしても面白くないので、身につかないと思う。動画の最初の単元構想の要素で出てきた「必然性、相手意識、楽しさ、リアル感」が満たされている活動だったんじゃないかなと思う。 また、課題点も感じた。それは児童の活動が少ないかなという点である。最後にゲームは取り入れられていたものの、もう少し児童が発言する場面が多い方が活気のある、勢いのある授業になるのかなと感じた。実際やってみると、難しいしこんな感じになってしまうが、客観的に見るともっと児童が話すシーンが増えるといいのかなと感じた。またこの学級の英語レベルがわからないので、何とも言えない部分があるが、児童の様子をみつつ日本語も混ぜていくことも大切だなと感じた。

⑰I,you,he,sheの使い方で子どもたちは戸惑うと思うので、私も同じ単元の授業をする時、教え方には工夫が必要だと感じた。 単元構想の4つの要素は、英語の授業の目的がしっかり設定されていて、授業を作る際は4つの要素を意識するだけでちゃんとした英語の授業ができると思う。 　最初のsmall talkでheやsheを使っていたので、Activities の時に、先生が「Mis Arima」と何度も言うことに対して生徒が「『she is』を使ったほうがいい」と意見を言えた。 授業に出てくる登場人物が生徒たちと関わりある先生が出てくるので、子どもたちの興味を授業に持っていけていた。また、クイズ形式の活動があり、生徒たちは楽しみながら学習していた。

⑱初めに良かったと思う点について述べる。1つ目は、How are you?の流れから、He,Sheの認識を持たせていた点だ。児童は自然と、男性をHeで示し、女性をSheで示すことを理解することができるだろう。2点目は、先生のスモールトークで、Ms,arimaを連呼することを通して、子どもたちにそれが不自然であることに気付かせていた点である。その気付きは簡単すぎず、難しすぎない、程よい難易度の気付きであり、こうした最初の児童からの気付きがその後の学びに大きくつながっていくと感じる。3点目は、難しい英単語も、授業者の大きなジェスチャーによって推測できる点である。最後の振り返りで児童からも出ていたように、この時間では、ただHeやSheだけでなく、先生の紹介を通して、先生のことを知ることが出来たり、先生の好きなもの得意なことを表す英文を学ぶことが出来ている。その学びがメインではなくても、先生の大きな楽しいジェスチャーによって楽しく学ぶことができるだろう。次に気になった点について述べる。1点目は、Ms,arimaがたくさん出ていておかしいから、Heを使った方が良いと発言していた生徒について、このようにすでに塾や自己学習などで、本時に学ぶことを知っている児童が教室内には多く存在する。このような児童にとってつまらなくない授業にするためには、どうしたらよいか、そのような子たちにとっても刺激的な授業をつくるために出来る手立てというものも考える必要があるだろう。2点目は、今回のこの単元の場合、セクシュアリティについて十分配慮する必要があるということである。活動の中には、○○先生は、HeかSheか考える場面があり、その中で、男性の先生の写真を指して、She?と尋ねた際に、笑い声があがっていた。教室の中には、もしかしたら自分のセクシュアリティのことで悩み、それを誰にも話せず、一人で考えている児童がいる可能性がある。その単元を通して何を身につけさせたいかだけでなく、その活動で誰かが傷つかないか、だれかを傷つけるような意識が生まれないかということに十分配慮して授業をつくる必要を感じる。

⑲今回は、大分大学教育学部附属小学校の益戸先生の、「She can run fast. He can jump high」の授業を見た。授業づくりの段階から、1人の先生の考えではなく、たくさんの先生で授業を作っていたので、様々な視点からの工夫によって授業が組み立てられており、豊かな学び多い授業になっていたと思う。他の先生たちを登場させて、その先生のできること得意なことを「He(She) can ～」の表現を使って紹介していたところは、先生たちの意外な一面や新しい発見などに触れながら、He、sheの使い分けや、canを使った表現などが自然と入ってくるような表現になっていた。問題点としては、このHeとSheの使い分けを学ばせる授業のあり方や、必要性である。今回は、1時間の授業を使ってHeとsheの使い分けについて学んでいっていた。Heは基本的に男性に対する代名詞、Sheは女性に対する代名詞であるが、それを学ぶにあたって深く注意すべきなのが、ジェンダーの問題だと思う。現在、性は多様化しており、男、女のふたつの性では分けることができない。しかし、この授業では、全ての性を男性女性のふたつに分けるというような考えにおちいってしまう危険があると感じた。この単元は、Iやyouではない、3人称が初めて登場する単元で、それを学ばせるために、今回はHeとsheを例にあげ学ばせていたと思うが、もしも、性に対して悩みを抱いている子がクラスにいるのだとしたら、このことに対して1時間授業を受けるのはとても苦痛になるだろうと感じた。なので、このような3人称の概念を学ぶ授業にしたいのなら、He、Sheだけに限定するのではなく、そのほかの3人称についても学ばせたり、He、Sheの使い分けでこんなにも時間をとって授業をする必要はないのではないかと感じた。 しかし、とても授業づくりや、授業の進み方や学びの質などにおいては、見習うべき素晴らしい点がたくさんあった。私は、ここ単元の授業を行う予定のため、授業づくりの参考にしたいと感じた。

⑳授業全体を通して子ども達みんなが知っている先生を題材として使っていたので子ども達の心を掴んでいた。実際子ども達の振り返りの感想でも〜先生の得意なことを知って驚いたと言っていたので身近な人を授業に登場させたのは大成功だったんだなと思いました。HeとSheを使う必然性を持たせるために最初にMs.Arimaを毎回主語にした文を多用して子ども達が毎回Ms.Arimaというのはひつこいと気付かせていてうまいなと思いました。その気付きがToday's goal: Ms.◯◯と言わないですむ言い方で先生を紹介してみようにつながっていてゴールの必然性が生まれていました。先生が簡単に男の人にはheを女の人にはsheを使うんだよと教えてしまえばすぐ次のことにとりかかることができるかもしれないが、このように子どもを惹きつける人を例文として使って子どもたちに何度も人の名前を呼ぶのはしつこいと気づかせたり、例文を何度も聞くことで男の人にはheを、女の人にはsheを使うんだと気付かせ、自分が考えているから子どもは楽しいと思うし自分で納得してheとsheの使い分けができることに気付いた。この授業を通して一方通行に説明する授業では子どもは受動的に授業にただいるという感覚に陥るが、子どもに気付かせる授業は子どもをワクワクさせるのだなと分かった。

㉑今回見た授業は外国語を教える上で参考にしたいところが沢山ある授業だった。Greetingsでは、いつものHow are you？の表現に加えて、Because she is〜.と理由を付け加えることで、本時のhe/sheの表現を自然に使っていた。めあての確認では、あえてMs.〜を繰り返し違和感を感じさせることで本時のゴールを示しているところが良いと思った。Let's watch and thinkとActivityでは、he/sheを使った文章を何度も繰り返すことで、男性にはhe、女性にはsheを使うという違いに気づかせていた。また、子ども達の身近な先生を取り上げることで、子ども達の興味を引き付けていた。Quizでは先生がクラスメイトの誰のことを話しているのか予想させており、ここでも子ども達の興味を引きつけることが出来ていた。Commentsの振り返りでもあったように、授業を通して、先生方や友達のことを知るきっかけになった。 今回見た授業は、めあてを達成するために必要な表現を、自然な流れで身につけることの出来る授業だったと感じる。今後、外国語の授業を作っていく上でとても参考になった。

㉒この授業の良い点は、まず授業の始めにチャンツを使って子どもの意識を授業に向かわせ、一体感を作っているところです。また、Sheを使う必然性に気付かせるために、最初にSheを使わないでTeacher Talkを行っているのが分かりやすいと思いました。Teacher Talkからめあてへの流れもとても自然だと感じました。授業の題材は学校内の先生を紹介するというものだから、男女の区別も身近で分かりやすいし、活動に興味を持ちそうだなと感じました。話をするときにジェスチャーしているのも子どもにとって分かりやすくなっていました。この時間ではHeとSheのインプットを中心に、クラスメイトや先生方を巻き込んでインプットを多くしているのがいいなと思いました。 改善できる点は、5人目の先生のときにHe or She?と問いかけていたが、その前の人を紹介するときにももっとHeやSheを強調すると気付きやすいんじゃないかと思いました。この段階では文字で見せていなくて音だけでHeとSheを扱っているから、HeとSheを聞き分けられない子もいるかもしれないので、もっと発音を強調してもいいかなと思いました。またHeとSheの使い分けをもっとクラスで確認してからペア活動に入る方がいいのではないかと思いました（黒板の女の先生の所にSheと書いておくなど）。

㉓この授業の良い点は、複数の先生の顔写真を紹介していくことで、児童は"he/She"の使い分けを予測できていた点である。また先生紹介の度に、"can swim fast."や"can play the piano"などの表現も交えて詳しく先生のことを紹介していたので、さらに児童の興味を引き出しながら、表現に慣れさせることをしていて、とても参考になった。だから、児童の振り返りで"he/sheの使い方が分かった"という声より、"先生の意外なことを知れて楽しかった"という声が出ていることは、he/sheの使い分けについて自然に学習することができていたことの表れだと思う。しかし、先生の最後の言葉も、今日学習したhe/sheについて触れていなかったので、とりあえず先生は学者した内容を確認した方が良かったのではないかと感じた。多くの手立てがあったのでぜひ参考にしていきたい。

㉔この授業のいい所は、なるべく英語を使おうとしていたところだ。英語が得意でないとそんなことは出来ないと思われがちだが、この動画の先生は恐らく不得意ながら殆ど英語でやりきっていた。先生の使っている英語は流暢なものではなく、時々非文法的なものもあった。しかし、授業の中で生徒にインプットを与えようと、一生懸命に喋っていた。そこが、生徒の英語に対する抵抗感を減らしていていいと思った。一方改善できる点としては、同じ名詞を繰り返して先生を紹介する例示を教師がやっていた点が挙げられる。あそこは、生徒自身にやらせた方が実際に面倒くささが分かって、何か他の表現は無いかと考えると思う。動画では代名詞を答える生徒がいたが、全ての小学生がそういった答えを出せる訳では無い。実際にやらせてみて、何が必要かを考えさせる機会を与えるべきだと思う。

㉕今回の授業は、授業者の優しさや穏やかさが伝わってきた授業でした。とても丁寧な口調で、英語の授業を展開し、児童達の興味が出るような先生やクラスメートを用いる工夫も見ることが出来ました。 私の中で改善点があるとするならば、単元構想として掲げているリアル感や楽しさが伝わっていないのではとも思いました。MrMs、 HeSheなどに焦点を当てることも良いですがグループワークや発表などの機会も設けることでまた違った面白さもあるのではと感じました。 今回も実際の授業を見ることができよかったです。ありがとうございました。

㉖今回の映像を見て思ったことは、自分が想像してたより日本語を使う機会が多いなということです。英語の授業なのでもっと英語を使うのかと思っていたら、日本語が割と多かったので、もう少し英語を使ってもいいのかなと思いました。よかったところは、実際に関わっている先生や子どもたち同士のできることできないことなどでhe,sheの表現に何度も触れることができていたところです。先生のジェスチャーもすごくわかりやすくてとてもいいなと思いました。全体的にみて、とてもいい授業だったと思います。

【担当教員から】

今回もいろいろな視点からの授業に対するコメントがありました。対面であれ，オンラインであれ，お互いの考えを交流させることによって，自分の考えが修正されたり，理解が深まることになると思います。人称代名詞は日本と英語国との文化の違いも反映しています。日本語では目上の人に対して「あなた(you)」を使うことには抵抗感があります。例えば児童が先生に対して You are very kind. と言った時に，日本語で「あなたはとても親切です」と言うことはなく「先生はとても親切です」となります。友達のことについても「彼は・・・」と使うことはほとんどありません。ここがこの単元の難しいところでもあります。しかし，英語を学ぶことは文化を学ぶことでもあります。この単元はまさに言葉に隠れている文化を学ぶ絶好のチャンスではなかったかと私は思っています。本時で扱うかどうかは別にしても，指導者としては，このような点も視野に入れておく必要があると感じました。もちろん時間的な制約もありますから，他教科（例えば国語）と関連させてこの点を扱うことも検討する必要があります。